

令和7年2月18日

男鹿・潟上・秋田 Offshore Green Energy 合同会社 御中

日本野鳥の会秋田県支部
支部長 佐々木 均 (公印省略)
秋田県横手市前郷一番町 1-21

大潟の自然を愛する会
代表者 堤 朗 (公印省略)
秋田県南秋田郡大潟村東 2-4-2

公益財団法人 日本野鳥の会
理事長 遠藤 孝一 (公印省略)
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

日本雁を保護する会
会長 呉地 正行 (公印省略)
宮城県栗原市若柳川南南町 16

「(仮称)男鹿市、潟上市及び秋田市沖洋上風力発電事業 環境影響評価準備書」に対する意見書

現在、貴社が公告・縦覧および住民意見を募集している「(仮称)男鹿市、潟上市及び秋田市沖洋上風力発電事業 環境影響評価準備書」に対して、鳥類保護の観点から下記の通り意見を述べる。

記

方法書に対して述べたように、対象事業実施区域(以下、計画地という)に設定されている海域(以下、当該海域という)は、「海鳥の重要生息地(マリーン IBA)」に選定された「飛島・御積島」と重なっている。また、計画地の北側には国際的に重要な水鳥の渡りの中継地として東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ

(EAAFP)参加地となっている「八郎潟干拓地」がある。さらに、当該海域は様々な渡り鳥の重要な移動経路であると同時に、計画地の周辺で繁殖する希少猛禽類ミサゴ(準絶滅危惧)やハヤブサ(国内希少野生動植物種、絶滅危惧Ⅱ類)の採餌域にもなっている。日本国内でも有数な鳥類の高頻度利用地であるこの区域は本来ならば風力発電事業の候補地から除外されるべき区域である。準備書の内容からみて、あらためて鳥類への影響が大きいことを確信したため、貴社がこの計画を白紙撤回することを強く求める。

このように鳥類の生息にとって重要な当該海域で計画をあえて進めるのであれば、鳥類をはじめ当該海域全体の生態系に負の影響を与えないよう、次に述べる点について最大限の注意を払い、改善策を講じるべきである。

以下に準備書の問題点について述べる。

風車の設置位置について

本事業は「八郎潟干拓地」のほぼ真南の海域に合計 21 基もの風車を建設する計画であ

り、シジュウカラガン（国内希少野生動植物種、絶滅危惧ⅠA類）、ハクガン（絶滅危惧ⅠA類）、亜種オオヒシクイ（天然記念物、準絶滅危惧）、マガン（天然記念物、準絶滅危惧）などのガン類をはじめとする鳥類の渡りの進行方向（南北方向）に対して多くの風車が垂直方向に配列される位置関係になっている。この計画では、風車への鳥衝突及び移動の障壁が発生する可能性が高くなることが懸念される。風車の配列は、鳥類の飛翔への影響を最小限にとどめるために、南北方向に対して一列になるようにすべきである。

また、準備書 348 ページでは、船越水道河口付近の風車の設置は計画しないとの見解を示しているが、河口からわずか 3km ほど南の海域から風車を建てる計画になっているのは問題である。鳥類が渡りあるいは移動のために高頻度で利用する河口から南にかけての延長線上には風車を建てるべきではない。

貴社が提示する鳥類調査の時期について

準備書によると、春の渡り時期の調査として貴社の調査は、船舶トランセクト 2024 年 4 月 3、4 日、16、17 日、レーダー調査 2023 年 2 月 24、25 日、ポイントセンサス 2024 年 3 月 20～22 日、空間飛翔調査 2024 年 2 月 14～17 日の日程で行ったとしている。しかし、2023 年秋～2024 年春のシーズンのガンの渡去の動きは例年になく早く、12 月末頃からまとまった群の移動があったことが報告され始め、1 月末から宮城県伊豆沼などの越冬地から中継地である大潟村への本格的な移動が始まり、2 月 10 日以降は大潟村からさらに北への移動を始めている。冬至が過ぎ、昼間の時間が長くなると鳥の脳にある松果体が刺激され渡りの衝動が次第に高まり、暖かい日があるとそれが引き金となり渡りが行われることが知られている。この年は雪も少なく、暖冬傾向であったため、異例に早い時期に本格的な北上が始まったと考えられる。したがって、貴社が調査を行った時には、大潟村以南から大潟村へ入る移動はほぼ終了しており、それが貴社のような観察例の少なさにつながっていると推測される。

このような時期を逸した調査の結果をもとにガン類への影響をほとんどないという評価を下すことは、科学的な妥当性に欠けているものと考ええる。ガンの渡りのピークをとらえ、最大ボリュームの飛翔数をもって評価を行うべきである。したがって、ガン類の調査を再度行うことを強く求める。

以下に 2024 年春のガンの渡りに関して日本野鳥の会秋田県支部が把握しているデータを挙げる：

・日本野鳥の会秋田県支部による 2024 年カモ科鳥類生息数調査

例年厳冬期の 1 月中旬に実施している調査で、2024 年は 1 月 13～14 日に行われた。この 1 月半ばの段階で、秋田県内のガン類の個体数は前年の約 1.2 倍、ハクチョウ類は前年の約 0.9 倍、カモ類は前年の約 1.2 倍で、総個体数は暖冬の影響で比較的多かった前年よりさらに増加した。この数字は、最近の 10 年間では 2020 年に次ぎ二番目に多かった。ガン類で最も多かったのがマガンで、大潟村及び五城目町・男鹿市払戸、三種町の水田などで大きな群れが確認された。次いで多かったのがヒシクイで、大潟村の他、三種町等で比較的大きな群れが確認され、総数でも前年の約 2 倍であった。ハクガンは前年よりもやや少なく、大潟村のみで記録された。シジュウカラガンは、2020 年に次いで 3,000 羽を超える個体数が記録されほぼ大潟村のみで記録された。12 月末から越冬地からの比較的大きな群の移動が報告されていたことを反映していると思われる。参考までに 2015 年～2024 年の推移を示す（表 1）

（表 1）2015 年以降の秋田県内カモ科鳥類個体数の推移

	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
ガン類	11,039	25,726	15,180	23,138	38,756	98,521	4,667	2,802	63,353	73,888
ハクチョウ類	1,647	2,610	2,466	2,683	3,993	5,522	1,008	1,159	4,425	4,050
カモ類	12,118	25,515	15,139	18,786	17,053	57,399	14,240	13,647	21,289	25,548
総個体数	24,804	53,851	32,785	44,607	59,802	161,442	19,915	17,608	89,067	103,486
確認地数	99	92	90	101	94	127	87	96	123	129

・大潟村

大潟の自然を愛する会の観察によると、昨シーズン（2024 年春）のガン類の移動（宮城・川渡・栗駒～由利本荘・大潟村・小友沼）は、1 月下旬までは天候や風によって北上と南下を繰り返し、1 月 30 日にかなりの数が宮城から秋田へ北上した。その後も天候次第でいくつかの群れが北上と南下を繰り返し、2 月 10 日以降はほぼ北帰行といえる動きを観察した。大潟村からの飛去は 2 月下旬から 3 月上旬頃というように、平年に比べて 3 週間ほど早かった。

・新潟県福島潟

ガン類の越冬地の一つである新潟市の福島潟においても、2024 年 1 月 27 日～2 月 2 日の週に大量にガン類が飛去・北上している。水の駅ビュー福島潟の HP にある自然情報によると、2024 年 1 月 27 日～2 月 2 日の週前半は季節外れの暖かさとなり、オオヒシクイやマガンの数がぐっと減ったことが記されている。これらの群が例年より早く大潟村に入った可能性が高い。

・由利本荘市

近年の GPS 追跡調査で宮城から大潟村へ向かうルートの一つであることが判明した由利本荘市においても 2023 年 12 月末から由利本荘市上空を北上・南下するガンの群が頻繁に観察されていたが、2024 年 1 月 30 日に 4600 羽を超える大群が北上した以後は本格的な北上の動きとなり、2 月上旬にかけて北上する大群が何度か観察された（写真①, ②）。例年はこのような大群の飛来は 3 月、早くても 2 月中旬頃であったがこの年はそれより 2～3 週間早かった。由利本荘市から大潟村へ向かう途中、子吉川河口付近、松ヶ崎付近、岩城付近、下浜付近で洋上に出るケースが多いことが地域住民によって確認されており、これらの群が計画地を通る可能性がある。由利本荘市はまた、新潟など日本海沿いの越冬地からの渡りルートの途上にあり、由利本荘市の洋上で北上・南下する群もしばしば確認されており、これらの群も計画地を通る可能性が高い。

由利本荘市内支部会員のガン類カウント数は 2024 年 1 月 30 日 4603 羽（日本雁を保護する会によるカウント）、1 月 31 日 190 羽、2 月 4 日 30 羽、2 月 5 日 1000 羽、2 月 7 日 55 羽、2 月 8 日 55 羽、2 月 9 日 600 羽であった。これは限られた時間内での個人の記録であり、実際にはより多かった可能性がある。

・小友沼

<https://www.city.noshiro.lg.jp/up/files/www/sangyo/kankyo/hozen/sizen/otomonuma/20232024otomonuma.pdf> のように、小友沼の週間最大飛来数は 2 月 10～16 日が 180,000 羽、2 月 17 日～23 日が 150,000 羽であり、貴社が渡り鳥調査を行った 2 月 14 日～17 日、レーダー調査を行った 2 月 24 日、25 日にはガン類の大勢は大潟村以北の動きへとシフトしていた時期である。

・能代市東雲台

2 月 17 日及び 18 日に行われた秋田県支部会員による春の渡り調査で、数万羽に及ぶガン類の北上が観察された。なお、調査は小友沼への飛来数に合わせて例年より 2～3 週間早めに行った（写真③写真④）。

表 2 に上記の内容をまとめ、図 1 で各地の位置を示した。

(表 2)

福島潟（新潟県）	水の駅ビュー福島潟自然情報によると、2023 年 12 月末から 2024 年 2 月初旬福島潟のガン類飛来数は以下の通りである： <table> <tr> <td>2023 12/23～12/29</td><td>オオヒシクイ 4300 マガン 960</td></tr> <tr> <td>2023 12/30 ～2024/1/5</td><td>オオヒシクイ 9400 マガン 2800</td></tr> <tr> <td>2024 1/6～1/12</td><td>オオヒシクイ 7500 マガン 2600</td></tr> <tr> <td>2024 1/13～1/19</td><td>オオヒシクイ 9600 マガン 3300</td></tr> <tr> <td>2024 1/20～1/26</td><td>オオヒシクイ 5600 マガン 910</td></tr> <tr> <td>2024 1/27～2/2</td><td>オオヒシクイ 330 マガン 150</td></tr> <tr> <td>2024 2/3～2/9</td><td>オオヒシクイ 19 マガン 110</td></tr> </table> ここでも 1 月末に大量に飛去している。 2024/1/27～2/2 のコメントに、週前半は季節外れの暖かさとなり、オオヒシクイやマガンの数がぐっと減りました。とある。 出典：水の駅 ビュー福島潟 HP https://view-fukushimagata.niigata.jp/nature-info/nature-info_2023/	2023 12/23～12/29	オオヒシクイ 4300 マガン 960	2023 12/30 ～2024/1/5	オオヒシクイ 9400 マガン 2800	2024 1/6～1/12	オオヒシクイ 7500 マガン 2600	2024 1/13～1/19	オオヒシクイ 9600 マガン 3300	2024 1/20～1/26	オオヒシクイ 5600 マガン 910	2024 1/27～2/2	オオヒシクイ 330 マガン 150	2024 2/3～2/9	オオヒシクイ 19 マガン 110
2023 12/23～12/29	オオヒシクイ 4300 マガン 960														
2023 12/30 ～2024/1/5	オオヒシクイ 9400 マガン 2800														
2024 1/6～1/12	オオヒシクイ 7500 マガン 2600														
2024 1/13～1/19	オオヒシクイ 9600 マガン 3300														
2024 1/20～1/26	オオヒシクイ 5600 マガン 910														
2024 1/27～2/2	オオヒシクイ 330 マガン 150														
2024 2/3～2/9	オオヒシクイ 19 マガン 110														
大潟村（秋田県）	昨シーズン（2024 年春）のガン類の移動（宮城・川渡・栗駒～由利本荘・大潟村・小友沼）は、1 月下旬までは天候や風によって北上と南下を繰り返し、1/30 にかなりの数が宮城から秋田へ北上。その後も天候次第でいくつかの群れが北上と南下を繰り返し、2/10 以降はほぼ北帰行といえる動きをした。大潟村からの飛去は、2 月下旬から 3 月上旬頃という平年に比べ 3 週間ほど早かった。														
由利本荘市（秋田県）	2023 年 12 月後半からたびたび宮城からのガンの群が由利本荘市上空を通過して北上・南下を繰り返していたが、2024 年 1 月 30 日に 25 群 4603 羽 1 月 31 日に北上してから渡りが本格化。その後 1 月 31 日、2 月 5 日、6 日、7 日、9 日に北上する群が観察され、それ以降は時折小さい群の飛来や通過はあったが落ち着いた。例年は由利本荘市に降りて採餌するが、この年はそのまま通過・北上していった。1/30 4603 羽、1/31 190 羽、2/5 1000 羽、2/7 55 羽、2/8 55 羽、2/9 600 羽														
小友沼（秋田県能代市）	小友沼のマガンの飛来状況は 1 月 27 日～2 月 2 日が 0 羽、2 月 3 日～9 日が 5 万羽、2 月 10～16 日が 180,000 羽、2 月 17 日～23 日が 150,000 羽であった。 参照：能代市 HP https://www.city.noshiro.lg.jp/up/files/www/sangyo/kankyo/hozen/sizen/otomonuma/20232024otomonuma.pdf 2 月 10 日の現地観察員の情報で、既に小友沼に立ち寄らず北上する群れが存在していた。2 月 10～16 日の時点で既に渡りの群は大潟村を離れ、北方向に向かっていたことが示唆される。 ちなみに過去 3 年の最大飛来日は、2023 年春 3 月 3 日 200,000 羽 2022 年春 3 月 16 日 113,000 羽、2021 年春 3 月 3 日及び 4 日 100,000 羽であった。														
東雲台（秋田県能代市）	秋田県支部が 2 月 17 日、18 日に小友沼の北 5 km ほどの能代市荷八田の定点で行った春の渡り調査（未発表）で、数万羽のガンの北上・東進が見られた（写真）。例年は 3 月上旬～中旬に行くが、この年は小友沼の飛来状況を確認しながら例年より 2～3 週間早めて調査日を設定した。														

(図 1) 各地の位置関係





以上の状況から、2024 年の北帰行は例年より大幅に早く、貴社調査の時期には大潟村へ入る動きはほぼ終了していたことがわかる。正確な予測評価を行うため、再度調査を行うことを求める。

ミサゴに対する影響

ミサゴは計画地のような海洋環境を採餌場所とする魚食性の猛禽類で、環境省レッドリストの準絶滅危惧（NT）に選定されている。本事業は離岸距離 1.5 から 4 km というミサゴの好適採餌環境に風車を建設することとなり、当該地のミサゴの生息に深刻な影響を与える可能性がある。準備書によるとミサゴは計画地内で 224 例確認されており、営巣場所も 2 か所見つかっている。この地域においてミサゴの生息条件に変化をもたらすべきではない。

猛禽類は前年の繁殖に用いた巣を繰り返し利用することが多いが、ミサゴもその例にもれず好適繁殖地への固執性が認められる。仮に本事業が実現し、建設期間中の騒音や水の濁り、稼働後の風車による障壁影響によってこれまでの営巣場所が営巣適地でなくなった場合、既に周辺が風力発電施設で埋まっているため代替地を見つけるのが困難になることが予想される。既存の風車と本事業による累積的影響を考えると、この地域でのミサゴの繁殖自体が困難になるなどの影響があるものと考ええる。

以下、本事業がミサゴに対して及ぼすと懸念される具体的な影響を述べる。

①工事期間中の影響

洋上風力発電施設の建設時の打設や掘削で発生する騒音や砂の巻き上げによる懸濁により、魚類が忌避行動を取ることが海外の研究で明らかになっているが、これはミサゴにとって採餌環境の喪失を意味する。また、ミサゴ自身にも騒音が影響する可能性がある。工事が行われる夏期がミサゴの繁殖時期に重なるため、工事期間中の当該地域での繁殖は困難を極めることが予想されるが、それは繁殖地の喪失を意味する。

②稼働後の影響

採餌海域の阻害

風車が並ぶ予定位置がミサゴの採餌場と重なるため、採餌・繁殖に影響を与える可能性が高い。準備書 898 ページの予測結果において「海岸沿いを飛翔することが多く、風力発電機間の飛翔が少なかったこと」「営巣地と風力発電機間が 2 km以上離れていること」を理由に「本種への影響は小さいと考える」としているが、これに反論する。「ミサゴが 1.5～3 kmあるいはそれ以上の沖合まで飛ぶことは海岸からの目視で何度も地元の野鳥愛好家によって確認されている。また、洋上では地元の遊漁船による海釣り愛好家によって沖合 3～4 kmの水深 40m ライン付近で頻繁にミサゴが目撃されている。

ミサゴの飛翔能力をもってすればさらに遠くまで飛ぶことは十分可能であり、実際 NEDO 次世代浮体式洋上風力発電システム実証研究の環境影響評価（2014 年）の調査^{注 1)}においても沿岸部からの離岸距離 5km～10km の地点でミサゴが確認されている。

また、営巣地からの距離に関しては、由利本荘市内で餌場の海岸から 3 km離れた営巣地で営巣木の松が枯れるまで数年間にわたって毎年育雛をし、無事雛を育て上げていた例があるため、本事業の営巣地から発電機間の距離が 2 kmというのは十分到達可能であり、ミサゴの安全を保障するものではない。

この先に風力発電機が建設され、その基部の構造物に魚が集まることになれば、その魚を狙って風力発電機に誘引される恐れがある。この海域に風力発電機を建てることはミサゴの生存に脅威を与えるものとする。

③バードストライクについて

衝突確率が環境省モデル・球体モデルともに 0.0002%であるから影響は少ない、としているが、これはあくまでモデルであり、実態に即しているとは限らない。由利本荘市では 2018 年 4 月に海岸に並んだ 7 基の風車のうち 1 基で起きたバードストライクによって給餌中のオス個体が死亡し、結果としてその年の繁殖に失敗した（写真⑤写真⑥）。また、2014 年 11 月 10 日、離岸距離 1.4 kmにある北九市沖洋上風力発電施設においてミサゴのバードストライクが確認されている^{注 2)}。さらに秋田県内の 2021 年稼働の新能代風力発電所事後調査でもミサゴの衝突例が報告されている（北羽新報記事 <https://www.hokuu.co.jp/?p=17497>）。

長崎県池島近海において 2009 年 11 月から 2011 年 1 月にかけて海上を飛行する鳥類の飛行高度を調査した結果においても、海上 30m～150mをバードストライクの危険のある高さとして想定した時、「ミサゴ、トビはバードストライクの危険性が高いと考えられた」としている^{注 3)}。

このようにミサゴでバードストライクが起きる確率は高いと予想され、育雛中にそれが起きた場合には当年の繁殖の失敗をもたらす。本事業は採餌場所である洋上に風車を設置するものであり、設置規模は前述の例より格段に大きいため、影響はこれまでの事例よりも大きくなると思われる。今後、各地で風車が増えるにつれ、このような衝突事例が増えることが予想され、風車の少なかった過去のデータに基づいた衝突確率計算による予測評価では、正確な評価はできないことを認識する必要がある。

なお、ミサゴが風車を避けるとは限らず、ロータの間をすり抜けることが当該地で何度も確認されている。国内でバードストライクが多い鳥種としてカラス類やトビが挙げられるが、これらの鳥はロータの間をすり抜けて飛行する様子が何度も観察されている種である。



これらのことを踏まえ、ミサゴの保護の観点からも当該海域は本来、計画段階配慮書を作成する以前に事業実施想定区域から除外されるべき海域であった。当該海域のミサゴの保護に資するよう、風車の設置本数を削減、設置位置の変更、繁殖期における風車の運転停止、バードストライク予防のためのセンサーの設置等、 possible の限りあらゆる手段を講じるべきである。

カモ類について

- ・ マガモ・コガモ・オナガガモをはじめとする淡水ガモは、普段の生息環境が内陸や沿岸の水域であっても、渡りの時は沖合に出て洋上を移動することが多い。本格的な渡り時期が始まる前に男鹿市船越海岸沖の洋上に数千羽集結するコガモ等の群れが支部会員によって確認されており、洋上を渡る姿も確認されている。準備書 849 ページのカモ類の飛翔図においてもカモ類が洋上の風車設置域内を飛んでいることが示されている。
- ・ 渡りの際カモ類は、何度も高度を変えながら飛ぶ。着水したかと思うと再び海面から上昇し、ブレード領域内の高さで飛ぶことを繰り返しながら移動する（写真⑪⑫）。渡りのピーク時には数十羽～数百羽の群が数時間の間に次々と断続的に飛んでいく。このような飛翔をするときには風力発電機が存在は大きな阻害要因となるだけでなく、衝突の危険性が高くなる。採用される風車はブレード下端から水面が 26.3m しかなく、波が荒いときにはもっと間隔が狭くなる可能性がある。カモが水面から飛び立つときにブレードが降りてくるタイミングと合えば衝突の可能性は高くなり、群全体が被害に遭う可能性がある。影響が小さいと評価するのは楽観的すぎる。
- ・ スズガモの年間衝突率が球体モデルで 12.4719 回であるにも関わらず、全確認数に比較し高度 M の飛翔が少なかったことから本種への影響は小さいとする評価（878 ページ）は、妥当ではないと考える。スズガモが渡りの飛翔の際に集結する群の大きさ、風の強い時に飛翔することが多い渡りの特徴から、スズガモに与える影響は大きいと考える。



（写真⑪⑫）カモ類は高度を頻繁に変えながら渡りの飛翔を行う。着水することも度々ある

なお、ブレード下端と海面との距離が 26.3m しかないことから、低高度で飛ぶ鳥にも衝突の可能性があることは、他の鳥についても同様である。

ダイサギについて

ダイサギには日本で繁殖し冬は南方へ渡る亜種チュウダイサギ *Ardea alba modesta* と、中国東北部で繁殖して冬に日本に渡来・越冬する亜種ダイサギ *A. a. alba* がいる。両者は姿が似ているため、1 年中滞在しているように見えるが、それぞれが渡り鳥であり、夏と冬で種類が入れ替わっている。大陸から渡ることから考えてもダイサギが洋上を飛ぶことは明らかであり、実際に洋上を飛ぶ姿が確認されている（写真⑬⑭）。この際に貴社事業の風車が阻害要因となることは明らかであり、限られた日数の調査で M 高度の飛翔が確認できないからといって、影響が少ないとは言えない。



(写真⑬⑭) 洋上を飛翔するダイサギ 2020 年 11 月 6 日 由利本荘市沖

カモメ類について

カモメ類は採餌のために洋上を飛び回り、着水もするため、飛翔形態が多岐にわたり、飛翔高度も様々である。カモメの採餌時の飛翔から鑑みて、高い確率で衝突が起こることを危惧する。また、ミサゴと同様、供用後の風車基部に魚類が蛸集されることがあれば、それに誘引されて風車に接近し、衝突死に至る恐れがあることを危惧する。

オオセグロカモメは個体数が減少しており、環境省レッドリストで準絶滅危惧に指定されている。これ以上は阻害要因を作ってはならない。

アジサシについて

アジサシは県内では春と秋の渡りの頃に飛来するが、方法書意見でも記載した通り、2023 年 5 月には数日間に渡って 5～6 千羽が船越海岸沖を北上するのが観察された。魚を捕食しながら移動するため、風車の存在は移動・採餌の妨げになる。重要な鳥の選定を受けていないため準備書内は記載がないが、風車の影響を受けやすい種として慎重に扱うべき鳥である。長距離を移動するアジサシの飛行経路を妨げてはならない。



(写真⑮⑯) 2023 年 5 月 27 日 男鹿市船越水道河口

その他海鳥及びシギ・チドリ類

これらの鳥の採餌時の飛行高度は低めであることは確かであるが、長距離を飛ぶ時は若干高くなる。前述のごとく、ブレード下端と海面との距離が 26.3m しかないことから、低高度で飛ぶ鳥にも衝突の可能性があることは、これらの鳥についても同様である。限られた日数の調査であるのだから予測は保守的な値にするべきであり、その意味で準備書の予測結果は楽観的すぎる。これでは必要な保全策を取ることはできない。

スズメ目小鳥類

日本国内では珍鳥とされるスズメ目鳥類が飛島と男鹿半島および八郎潟周辺において共通して確認されている例が多く、飛島と男鹿半島間の鳥類の渡り・移動経路が存在してい

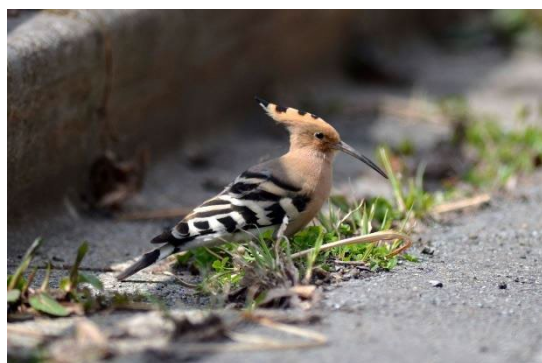
ることを示唆している。そのような鳥類にはヤツガシラ、オオモズ、ハマヒバリ、ヒメコウテンシ、コヒバリ、オオセッカ（絶滅危惧ⅠB類、国内希少野生動植物種）、ギンムクドリ、カラムクドリ、ホシムクドリ、クロウタドリ、ノハラツグミ、オガワコマドリ、オジロビタキ、セグロサバクヒタキ、ヤマヒバリ、マミジロタヒバリ、ツメナガホオジロ、ユキホオジロ、シラガホオジロ、コホオアカ、シマアオジ（絶滅危惧ⅠA類、国内希少野生動植物種）、シベリアジュリンなどがあげられる（写真⑰～㉔）。小鳥類は群れで夜間も渡ることが多く、バードストライクの発生が懸念される。これらの鳥類の渡りの障壁になる可能性が高いため、この海域に洋上風車を建設すべきではない。この中でも特に希少種は、発見例が少ないため衝突確率の値は低くなるが、希少種ほど衝突死などによって種の保存のリスクがより高くなることに留意すべきである。



(写真⑰) オジロビタキ 2012 年 11 月



(写真⑱) ハマヒバリ 2013 年 11 月



(写真⑲) ヤツガシラ 2014 年 4 月



(写真⑳) ユキホオジロ 2014 年 11 月



(写真㉑) ツメナガホオジロ 2016 年 10 月



(写真㉒) サバクヒタキ 2017 年 10 月撮影

事後調査について

準備書 1216 ページでは、バットストライク・バードストライク調査について稼働後 1 年間を対象にして行うとあるが、洋上での死骸回収の困難さを考慮すれば明らかに不十分である。少なくとも稼働後 3 年間は事後調査を実施し、その後も稼働期間中を通して定期的に行うべきであり、渡りの時期には特に調査回数を増やすべきである。また、方法については風力発電機のメンテナンス時に船舶からの目視等による発見・回収だけでは状況を把握することが困難であるため、専門家からも指摘されているように、監視カメラ・レーダーによる 24 時間・365 日のモニタリングを行うべきである。その結果影響が認められた場合、影響緩和策として風車の一時停止または必要とあれば撤去も想定するべきである。

なお、今回の意見書に記載した内容は概要としてまとめる際に、写真、表も含めた原文のまま掲載することを希望する。

以上

脚注：

注1) 「NEDO 次世代浮体式洋上風力発電システム実証研究（エコ・パワー株式会社）環境影響評価書」（平成 28 年 12 月）第 8 章「調査の結果の概要並びに予測及び評価の結果」図 8.3-41、p 8-80

注2) NEDO 平成 27 年 着床式洋上風力発電導入ガイドブック p183

注3) 北九州市環境局 平成 28 年 8 月 洋上風力発電事業における 自然共生策検討調査